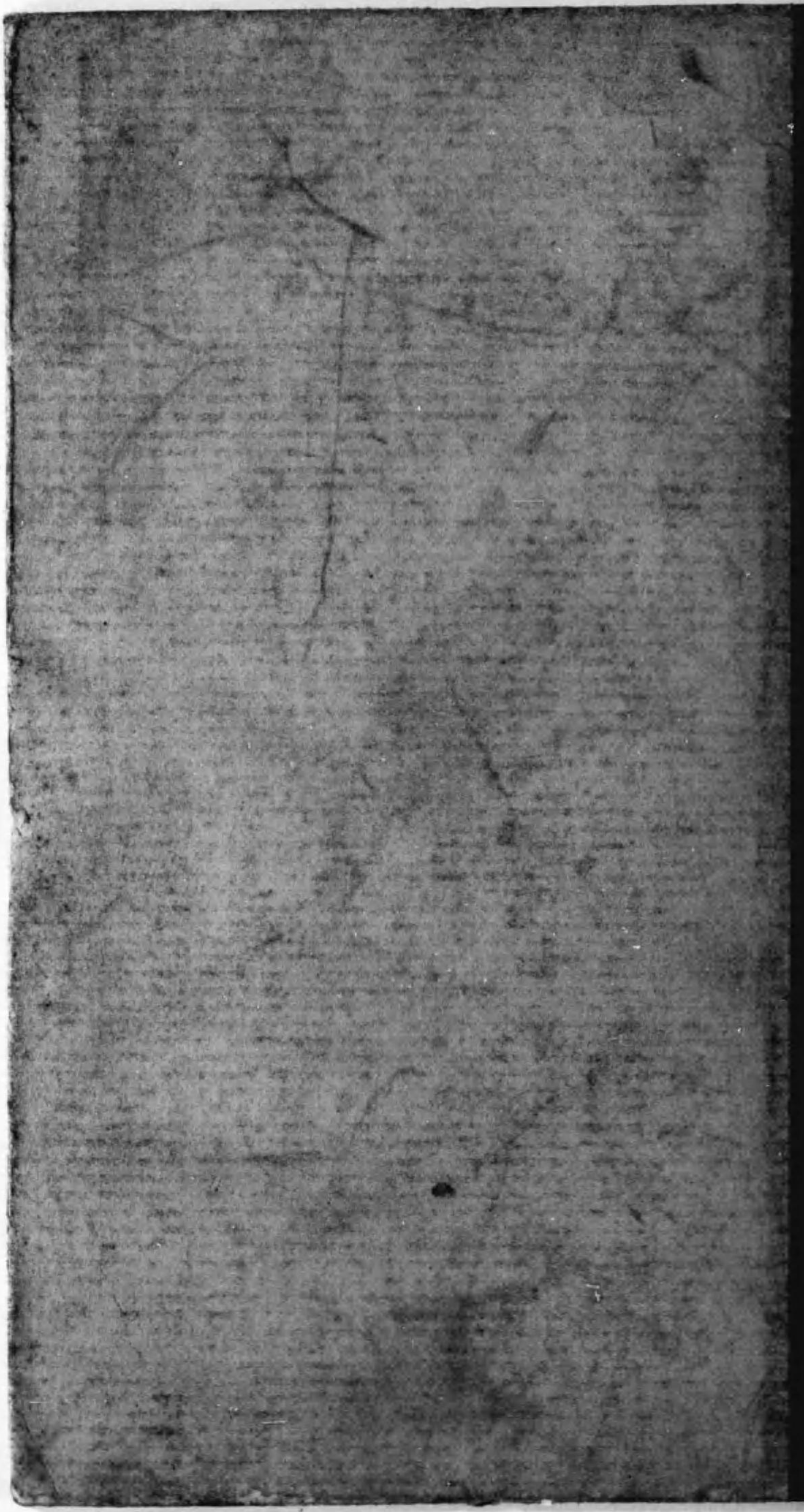


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 15 20 1 2 3 4 5

始





特233  
959



古志略

太田静思遺著





静思と筆跡



静思  
木槿花  
ひらく  
花を  
ま  
静思



## 序

もの事に、きちようめんな君は、死後、君の身のまはり一切、何を見ても、一糸亂れず整理してあつた。

遺稿「古志路」は、殆どそのまま印刷に附していゝやうに、一頁三首づゝ、歌集用の一冊に、年別を以て、筆録し盡してあつた。表紙の「古志路」は君の筆跡を採つた。歌誌「葦附」によつて、十四年度の分をわづか補つたばかりである。

静思一周忌の前に、上梓しようと、土地の歌友に謀つた。すぐ



にも出来るべき筈であつたのに、いかにも遺稿が完備して、造作なくやれるやうになつてゐるので、一周忌間際まで、うつちやつて、故静思君に、おもはゆい氣持である。

われわれは故静思の作歌について語るよりも、われわれ静思その人を知るものにとつては、静思その人を語りたいのである。しかし、それは、一篇の傳記的價値を有するとおもつてゐるので、簡単に記することもむづかしい。

君が母に抱かれて、北海道から數奇な運命の子として、流れるやうに、縁故あつて、山代の温泉地に來て寓居してゐた。母と子の二人切りの、二階住ひの佗びしい生活である。しかも、穉き時

代から、喘息病に罹つて、月に三四回は強烈な發作があり、その呼吸困難は、今か今かと、玉の緒の危かりし年月を送つて來たのであつた。

佗びしい生活の中にも、貴公子のやうに、こせこせせず、しかも、純眞、孤高、さうして、何等奇矯な風がなかつた。近年まで、頭髮は常に、母の手鋏によつて剪られてゐると云つた風で、羅漢頭で、肩が聳えてゐたが、ちつとも變でなく、何處かやさしく、常に、折目だつたみなりや、行儀よき立居など、極めて、尋常であるのが、われわれには目に立つて、町の青少年には、見られないことであつた。穉い時から佛法は深く信じてゐた。



美しうて、優しうて、さうして堅固な一女性としての母なる人の撫育が、静思の人爲ともなつたと云へ、孤貧、病弱、青年隱士とも稱したき清高なる風格を作り上げた君の精神力と努力とは、高く買はねばならぬと思つてゐる。

さうして、われわれの見逃してはならぬことは、地方青年に、ひそかにも及ばしむた感化力こそは、貴いものでなければならぬ。世に無名であらうとも、小さくとも、眞實眞に光れるものに關心を深めたいことである。

故あつて、凡そ二十年住み馴れた土地を、昨初夏、去らねばならなかつたが又、故あつてまもなく、母の故郷、われわれの隣郡、

能美の地に歸つて來た。さうして、孟蘭盆會に墓參のかたがた山代にやつて來た。われわれと歌會もし、盆踊も見た。二日顔を見ないと思つてゐると、十九日の朝すでに、君は寂滅の姿となつてゐた。

それが、例の發作を來して噎れて了つたのである。自分の裡に何かと、ぽきんと折れたやうな感じがした。育ち、患ひ、歌ひ、戀をした山代の地に、死處を得たことは又、有縁のことであつた。住み馴れた土地を、關西御影に移ることになり、川田順先生にも會つたと、喜んでゐたし、關西から戻つてからも、健康は良い方だと云つてゐたし、永く氣にしてゐた職業にも、どうやらあり



つくやうになり、闘病二十年、ちつとも魂の挫けしといふこともなく、信心は透徹の境に進み、且つ戀を得て、その意氣、颯爽たるものがあり、青春二十五の靜思には、作歌に於いても、大飛躍を見るべく、われわれは、いかに期待してゐたことであらうか。友誼深い君は、多數の友人に親しまれてゐた。これらの友人と、この「古志路」によつてまた、靜思を語らうではないか。

昭和十五年八月

山代温泉雨日庵にて

鴨記

### 昭和四年

今年生の竹をわたりて吹く風もいつか夏めき  
涼しかりけり

朝ぼらけ野邊の千草におく露をしみじみ見れ  
ば秋は來にけり



葉の落ちてしよんぼり立てる桐の木にしぐれの雨の降りそよぐなり

昭和五年

鉢植の百合のつぼみのふくらみを朝ごとに見ればたぬしかりけり

何ごともあきらめるよりほかはなしわれ黙然もくねんと虫の音をきく



明日もまたよく晴るゝならむ悠々と鳶は舞ひ  
をり暮れゆく空に

行きすぎし夕山小田の蓮田はちすだに葉すれの音の一  
しきりわく

うつくしくきらめく星の一つ一つにこゝろひ  
かれて道さまよひぬ

砂いちりする子にまじりあそべどもこゝろは  
つひに去りし日のもの



昭和六年

胸ぬちに描けるひとあらずしてわれにうつ  
ろの春は來にけり

悠々と丘のかなたに陽は生れぬ年あらたまる  
しづけきあした

おほ空をかけなむものところのみはやれど  
つばさの弱き雀子

かなしみはいづれの日ぞ去るものか人間の  
身はかなしかりけり

めぐまれぬ運命をのろふことなかれ過去の罪  
のむくいなりせば



往來するをみなのがたなまめきて温泉の街  
に春は來にけり

この眞晝吹きとほる風のうらさびし暑き中  
にも冷えひそみゐて

つくりしは彼かそも亦みづからか良き家の子  
とのかなしきへだたり

一むらの竹の葉すれのかそかなる音にもおぼ  
ゆ秋のおとづれ

床の間に机の上に棚の上におきかへて見つ菊  
の一鉢



昭和七年

冬の月冴えわたりつゝ裏山の杉の木立は見る  
に寒かり

散切りにて一生とほすつもりなり長髪の人を  
いやしめにけり

年中を床にし過すわが身なりどのシートにも  
インク滲めり

湯のけぶりしらじらぬくし春の氣の四方にみ  
なぎる山脊やまねの郷

新入生を見て（一首）

進むべき道に進める子らを見つゝ起ち得ぬわ  
れは泣きたくなりぬ



常磐木の葉すれの音のかそかにて山の御寺の  
晝深みかも

御佛に身をまかせし笠と杖世めぐるひとを美  
しみ思ひき

揚雲雀見きはむとて仰げどもつよき日ざしに  
目を閉ぢにけり

落雲雀さへづり澄みて江沼野の果てに起き伏  
す越のやまやま

清樂庵（一首）

清樂とはよく名づけたり四方の景ほしいまゝ  
なるこれの庵は

いたづらに國ぬちあらそふときならず一つ心  
にいざ奮ふべき



ものものの樹々青葉しぬうつそみのわが癒ゆる日は何時のことそも

語るにもおもわを染めるをとめ子のそのやさしさをよしと思ひぬ

湯上りのほてる素足に心地よく露こぼれかゝる夜の草徑

眞晝間の日さしまぶしき浴室ゆわが眞裸のおちつかぬかな

身も魂もほぐれゆくかなこれの湯に誦す念佛もおのづからなる

つぶなる葡萄一粒々々をもぎはなしつゝ秋をしおもふ



をとめ子が鳴らすほゝづき庭さきに鳴ける蛙  
と似たる夜半かな

秋の夜のわびしき想ひ文机ふづくまの京人形に呼びか  
けて見ぬ

ひえびえと降りつゞく雨にわが庭のみそ萩の  
花色あせにけり

小夜ふけの目覺めに聞くや此の部屋の静寂しじまに  
とほる松虫のこゑ

何時になく朝とく起きて吐く息の白さにたけ  
し秋を覺ほゆ

たらちねのこゝろすぐれずと臥せり給ふ夜の  
しゞまの虫ぞわびしき



われとわがあさましき性をあざけりつゝ猶を  
とめ戀ふる秋の夜半かな

落つる陽のかけなゝめなる窓のべに思ひ果て  
なく笛ふきにけり

鶉鳴くや晴れわたる日をうれしみつゝ筆さし  
おきて外に出て行く

われとわが落葉踏む音をさびしみつゝ晝うすぐ  
らき藪こみち行く

はりかへし障子を照らす小春日も心に泌みて  
母と語らふ

散り敷きし落葉も泥にまみれつゝわが庭の冬  
はすでに深しも



昭和八年

庭つ鳥けゝろけゝろと鳴くこゑに新年あたらしく生るゝ  
初明りかな

きさらぎのほのめく日ざし脊せきに浴みて遠くき  
らめく雪野こそ行け

金のため又名のために政治せいじおろそかにする醜みにく  
の大おほし臣しん

母は子を子はまた母をたよりにてつゝましや  
かに暮すたぬしさ

裏山の遠くに風の音ねわきたちてやがて厨の戸  
に吹きつゝのる



日のひかりこゝにとほらす御社の古木のかげ  
に凍てし雪かも

庭木まだはだか木なれども日をつぎて降りし  
きる雨の春めきにけり

寝そべりて聞くものにして心地よし春めきし  
宵を雨ふりそよぐ

日をつぎて降る雨ぬくし簇々とわが庭のべに  
萌ゆる若草

江沼野は冬枯れなれど春や來し向つ山々うす  
がみひく

病床賦(十一首)

注射すら効能の見えず今はたゞ苦しきまゝに  
身をまかすのみ



はげしくも苦しき増せば細りたる此の玉の緒  
を断たむとも思ふ

苦しさに耐へ得ず泣けばなぐさむる母の言葉  
も涙にふるふ

櫻いま見頃なりてふ大堰宮あくがれつゝも病  
みてやるわれは

いさかは病み癒えたれど絶食の腹たよりなく  
ものいふも憂し

六日ほど病みこやりゐて今日みれば庭のこぶ  
しは盛りすぎたり

かすかなる熱にけだるく臥りをればものうげ  
く鳴く初蛙かな



妻となるひとはなからむ貧しさの猶その上に  
病みつゞくわれの

柱とも杖ともたよるひとり子のわれの弱きを  
如何に思召す

やさしくももの問ひ給ふたらちねにいらへも  
せずゐてその後の悔い

許したまへ病めるがゆるにやるせなくあらし  
言の葉口にするわれを

わが歌にわが庭といふ言葉あれどわが庭なら  
で隣り家の庭

朝毎をわが好みなる茶漬飯さらに味ます澤庵  
うれし



晩春の眞晝日さしの強ければ茶種の花を見る  
眼いたみぬ

春ふけて寒さも失せし月夜道思ひごととしてた  
だ歩み來つ

庭樹みな青葉しにけり部屋ぬちの暗さうれし  
み日ねもす籠る

山おろし吹き來るなべに早苗田のそよぎすが  
しくゆうづきにけり

山中温泉（五首）

日のひかりこゝにとほらず谿間の岩のしめり  
にうかとすべりぬ

溪河の流れのひゞき強けれど河鹿のこゑの澄  
みてきこゆる



裏山の木群のかげのほの明り見つめてあれば  
月のぼり来ぬ

炎天のほとぼりのこる二階座敷裸にて對ふ夕  
餉の膳に

蝸は日ぐれのもの<sup>と聞きぬしに朝より鳴くも</sup>  
山かげの宿

キツチリと折り目なけねば氣のすます今宵も  
衣を床に敷き寝る

湯上りの膚すがしく端居してグラデオラスの  
花活けにけり

いなづまの鋭きにわれ眼を閉ぢて頭の上とど  
ろくい<sup>かづち</sup>に怖づ



あなかしこ罪人われを捨て給はず守りづくめ  
なる慈悲の彌陀佛

進歩せし醫學などとは言ふべからずわが喘息  
治す醫師あらざり

しほれたる花に霧吹く日盛りや淡き山虹はあ  
らはれてけり

ほの明りいまだしのこる小庭べにはつはつ咲  
けり夕顔の花

くつきりと杉の大樹は聳えをり今むくむくと  
雲の峰わく

自動車の過ぎにしあとの砂ほこり國道筋に晝  
顔の咲く



山中温泉よしのやにて

泳ぎぬし子どちは去りて清みゆくこゝの淵瀬  
に河鹿鳴きいづ

夏籠りを身のおきどなしせめてもに山水の軸  
を書齋へやにかけたなり

つゆむしのこゑ静かなる夕月ゆづき夜離よしまりしひとを  
戀ほしみにけり

母病みて臥床かどに入ればわれも亦わびしくなり  
て早寝しにけり

風邪に臥す母の寝息もかすかなり此のしづも  
りに虫のこゑ澄む

秋雨の夜に入りてより冷やゝけし吊りなれし  
蚊帳と今宵わかるゝ



人の世に生れし使命はそも何ぞ十年を病みて  
爲すこともなき

關口勝三氏に（一首）  
歌はさらなり批評は言々肺腑つく小兵なれど  
も君はつはもの

うれしさにはたわびしさに涙ぐむ女々しき性  
や病みて久しき

久しきを病みつゝわれのいつしかにつくりし  
性かたゞにひがむも

いつにならば病み癒ゆるらむわが庭の梧桐に  
秋風立ちそめにけり

この部屋に入り込む晝の日ざしすら秋を思は  
す明るさにあり



地震の來しおどろきいまだ止まずして檢温器  
いま九度六分しめせり

意識なき時にも念佛となふちふ母わがために  
まろびて泣く

誦法じゆふは知らねど假名をたどりつゝ阿彌陀經誦じゆ  
せし後のやすけさ

まとまらぬ歌のひとつを思ひぬし心ふと外れ  
て念佛にふとなへ居り

病ひやゝよくなればすぐ物を書くわがために  
母ペンをかくしぬ

いとまあれば物思ひに耽る癖蕭々として秋風  
吹くも



抱けばすぐ足踏み張りぬみどり子はたゞ一筋  
に立たむとすらし

七日月のかけも秋づきおぼしまの手すりしめ  
りてこほろぎ鳴く

子を抱く人の寫眞に題す（一首）

母と子の情こころひとつに融けてこそこの安らなる  
うつしゑとなる

剃刀のひやりとした肌さはり秋の灯の下もと頬髯  
そるも

枕べゆふひに鳴き出でしこほろぎや床の活花  
にひそみぬしかも

晝の間に入り來しならむ夜の部屋に姿ひそめ  
て蟋蟀の鳴く



歌ごころ澄みゆく夜半のしづもりに茶はよろ  
しもよ岩根の番茶

臥すわれに母窓の戸をあけませど月は庭木の  
かげに澄み居たり

病室の窓より見れば月明き空よぎりゆく渡り  
鳥かも

或る少女に寄す (一首)

衣縫へる針のはこびのたしかさや君が心のほ  
ころびも縫へ

晩秋の日ざしをりをり照り強み河底に鋭き小  
石のひかり

小夜しぐれ降りゐるらしも小庭への落葉にそ  
そく音のかそけさ



朝にけに萬年青の珠寶色づきぬわが吐く息の  
白き此のころ

たえまなき咳にねむれず歌詠めば午前三時を  
腹すきにけり

病みつゞく今年は障子はりかへず切り張りせ  
むと南縁に出ぬ

晴るゝ日を外氣戀ひつゝ臥り居れば鶉の高鳴  
き窓にひゞかふ

二年越し汽車にも乗らず湯の町のこれの狭さ  
になれにけるかも

黒づくりもとめてうまし此の日頃たきたての  
飯はうれしかりけり



味はひの淡白<sup>うすか</sup>を好むわが病みて後の營養に母  
なかむらし

月明り冷えわたりつゝ庭木々がおとせる影の  
くきやかなるも

十二月二十三日 皇太子殿下御降誕奉祝（一首）

日の本の彌榮えゆく瑞兆<sup>しるし</sup>なれ世は非常時に皇  
子の生<sup>あ</sup>れまし

この日頃病ひの癒えず朝寝癖飯食ふ時刻も定  
まらなくに

病みつゞく床に希望<sup>ねがひ</sup>も消えゆきつ希望<sup>ねがひ</sup>なき身  
の安けさもよき

わびしけれ師走ぐもりの日ねもすをひたこも  
りつゝ思ふこと多し



静思流ですよと母にたはむれつつごもりの夜  
を松活けにけり

昭和九年

伸びのぶる神つ御國のあらたまの年の初日は  
雄々しくもあるか

味噌汁にきざみ入れたる柚子の香のほのかに  
うれし冬の朝餉は



餘裕ある生活にあらず病むわれや老います母  
を見るが哀しき

自らはつゝれに近き苦勞してわが養物のみそ  
ろへます母

たらちねの他家にい行けばわれも亦あと追ひ  
ゆきて笑はれにけり

たまさかの晴れをうれしみこもりゐる部屋の  
玻璃戸に庭雪の反射

世を捨てし氣か恥らひもあらぬらしたゞ着ぶ  
くれて母の外出は

たらちねはよき人なりと賞められつゝ子われ  
ほのかなる誇りを覺ゆ



街果てゝすなはちまぶしするどくも雪の廣野  
に陽の照りかへす

空も地も雪一色にとざされていづくにかあは  
れ寒がらす鳴く

眞晝間のつよき光にまぎれ入る雲雀の聲は聞  
くにかなしき

この二階に十一年は住ひつゝ家主にさへも荒  
言云ひぬ

朝鮮の子らあはれなれ異郷のこの地の言葉い  
ふにたけたり

日もすがら湯氣立てとほす此の部屋のぬくさ  
をひらく花瓶の梅



ねこ柳活けし茶の間に射し入れる湯の明るさ  
も春めきにけり

久しぶりに履きし朴齒の重たさも心にしたし  
く春を出あるく

通人は露の薑味噌を好むてふ苦味言はずに通  
人ぶるわれは

母と子とかたみ頼りたよられつ生くるいのち  
のかなしかりけり

苦しさに食さへ攝れず臥りゐて飯喰ふ母を見  
るが美しさ

佛誕二千五百年の聖辰を迎へて (三首)

あなかして汚れし末世の人われの胸にも釋迦  
のいのちかよへり



わが胸に今なほ佛陀の大生命生きることの力  
強さよ

わがために彌陀の教法説きませる釋迦の恩徳  
今日讃ふべし

ほそ雨の二日つゞけばわが背戸の名知らぬ小  
木の芽ぶきしるしも

窓ゆ見る背戸の櫻も咲きにけり病みふせる身  
の心のいらち

寫眞撮影(二首)

寫眞うっしきのよくなれかしと氣どりつゝすます心を  
卑しとおもふ

氣どる心かくあればにや年頃の人の寫眞は見  
るにいやしも



草に坐す百姓の膝に顔そろへ馬のどかにも草  
食みて居り

病みつゞくわがあはれさや友と寄れば友は仕  
事の話のみする

水鏡同人西出茶鳩氏に（銀行員なれば）（一首）

他人の金に算盤をおく生活に疲れず君は貴き  
歌詠む

今居らば十五ならむか夢に見る妹はいつもあ  
はれ幼な子

安宅の關趾に遊びて（一首）

辨慶が逆植松といふ朽松をそぼぬらしつゝ夕  
雨けぶる

たらちねが心こめたる手づくりの烏賊の刺身  
に飯喰ひ過ぎし



潮騒のまにまに鳴くや海鳥の聲に病む身の心  
いたむも

荒波のうねりのまゝにうねりつゝ出でゆく釣  
の小舟かなしも

あな浪に吞まれたるよと見るが内に小舟はか  
ろく波の秀ほに浮く

舟人は波のうねりのそのまゝに身をゆだねつ  
つ小舟やるらし

大地おほちの極みに立ちてわが見るやまろまろ燃え  
て海に落つる陽

主のなき小舟波間にたゞよふは海女あま牡蠣採り  
にもぐりゐるらし



渚べは出水の後の塵あくた海女うちむれて薪  
あつむる

沖遠く釣する人の話すこゑ時にはきこゆ潮騒  
の間を

並べ干す網の匂ひのするどくて眞晝の海は風  
ぎ渡りをり

海の風まともに吹きて汗ばみし内股のあたり  
こゝろよきかも

波くれば飛び波くれば舞ひあがり餌あさる鷗  
のひたぶるなるも

波寄するまにまにかよふほのかなる海の匂ひ  
のしたしかりけり



砂濱に腹這ひ居ればとどろとどろ波のひどき  
の身ぬちに應こたふ

わだの原風ぎの静けし白雲のうごきにも秋の  
近づく思ほゆ

波の末足にとどくをこゝろみに渚の宵をひとり  
歩めり

濱沿ひの道をし行けば藻の匂ひそこはかとな  
くたゞよひ來るも

鹿島の森にて (二首)

老樹々の繁りをぐらし梢ゆ洩る晝の光をさび  
しみにけり

吉崎別院にて (二首)

吉崎の山松風にもあなかしこ御法の聲のこも  
れる如し



七十一日目に歸宅（二首）

二ヶ月ぶりに歸りてしたし倚りなれし机の艶  
をいとしめるかも。

幸福はわれら母子にめぐり來ず二階住ひにあ  
き果てにけり

素直にも生きゆくものゝかなしさや吾を見る  
犬の眸にひかりなき

ある宵はものゝ生命を愛しみつゝ蚊のさすま  
まに脛まかせ居り

あきらめてありつゝもとな夜毎々々繁くなり  
ゆく虫の聲かも

大方は凋へてはあれ子供らが持て來し萩は瓶  
に活けたり



雨の夜を蚊帳と別れて電燈とんぼの明さうれしみ書  
讀みふかす

たらちねを安らかにこそあらしめむ希望ねがかな  
しも身さへ病みつゝ

病み臥せば夜嵐をすら恐しみ今宵の月も窓越  
しに見る

雨はれて殊にさやけき月光つきひかりや燈を消して寝て  
心おちつく

かすかなる熱に眠れず夜半を聴く虫の音しど  
に心つかれぬ

母の愚痴無理しなからむ頼りとす一人子われ  
に病みの絶えねば



病むわれと看護の母ともごもの話のおちは  
愚痴となりゆく

いつになく静かごろとわがなりて夜半の静  
寂に念佛唱へ居り

赤蜻蛉群れて飛びつゝ眞晝間をほゞけ芒の立  
ちの静けさ

赤蜻蛉群れ飛ぶからに草の葉の音を立てつゝ  
夕さりにけり

わが病ひよき日つゞけば母かなし唄を小聲に  
縫ひてゐたまふ

いとしさは胸に充つれど男われ母慰むる言葉  
知らざり



今日もまた書くことのなき日記な 夜半の静  
寂に坐してわびしも

町果てゝ野に來すなはち見ゆるもの冬ざれの  
山に炭焼くけむり

西空にたむろせる雲の見るが内に暗く沈みて  
しぐれそめけり

しぐるゝと見る間たちまち陽のさして向つ嶺  
兄の秀紅葉明るし

まゝごとにひたぶるの子らむきむきにその家  
家のならはし見する

音もなきしぐれの雨やいつしかに木々の葉毎  
にたまる露はも



ふところ手ひとり思ひに耽りつゝふと觸れに  
ける袂くそかも

清しさを愛でし短冊の掛軸も寒くし見ゆれ冬  
は來にけり

玻璃戸越し見つゝしあれば風すさびすさびの  
まゝにしきり落つる葉

歌ならぬ心のとがりさびしきろ鉛筆のシンを  
又も折らしぬ

幼きゆ温泉の里に住ひつゝ痴言さへやいつか  
覚えし



昭和十年

晴れわたる元朝の空よ人われらつゝましくし  
て生くべかりけり

病むことを今朝は歎かずたらちねとめでたき  
言を交しけるかも

病むわれと看護つかれの母とゐてつゝましや  
かに春をことほぐ

鴻巣盛廣先生へ（一首）

萬葉の奥をきはめて敷島の道にかゞやく君が  
功績

米山久子女史へ（一首）

をみな子の直ぐなる道を説き諭す君こそ越路  
に尊き存在



長男を得し山下巢泥氏へ（一首）

非常時の春をひかへて頼母しさ産ぶ聲高き男  
の子擧げたり

尾道市・千光寺（一首）

海賊の村上が巢と傳ふなれ岩群立てる千光寺  
山

同・淨土寺（一首）

國寶の多寶塔下に眼を放つすなはち展く瀬戸  
の海ばら

岩佐健氏に逢ふ（一首）

打ちとけし君なりければいつかあが心ゆるみ  
て胡坐してゐし

空見れば空笑むごとし山みれば山笑む如し病  
よき日は

朝戸出の眼にしたしさや雪のこる山をつゝみ  
て春霞立つ



水やゝにぬるみゆくらし日毎來る川べりの蓬  
ほぐれしるしも

京都・三十三間堂（一首）

人と柳の奇しき縁をかなしみつしみじみとわ  
が此の寺を戀ふ

同・清水寺（一首）

清水の音羽の瀧の前にして瀧のありどをわが  
尋ねつる

大阪・天王寺（一首）

天王寺大釣鐘の下にしていのちのふるへわが  
感じ居り

奈良（三首）

見てありく古代文化のあらはれし強き力のな  
つかしきかも

夕まけて鹿啼く聲もあはれなれいにしへ偲ぶ  
奈良の都に



夕まけて鹿寄せ笛のひゞかへば故里戀し母と  
あつゝも

障子あかりどの切り張りしたるところどころほの白み  
つゝ明けかゝり來ぬ

かすかなる熱に臥りて聞くからに春めきし宵  
の雨はしたしも

草被ふ山の井に魚ひそみつゝ眞晝ひそかに雨  
降りそゝぐ

汗ばみて堤さきをこそ行け花散らす日和の風の身  
には泌むなり

聽蛙抒情(五首)

ぬくとさをほゝけ鳴き出でし田蛙に戸を繰れ  
ば背戸は月夜なりなり



臥りつゝあれば親しもげくげくと庭のべに來  
て蛙鳴きいづ

背戸のべに蛙の聲のそろひつゝ宵をぬくとき  
雨となりけり

風落ちて本降りとなる夕雨や背戸に蛙の聲そ  
ろひたり

よく聽けばひそけき夜半の蛙子は背戸のあた  
りと門のべに鳴く

水枕やゝぬるみゆく夜のほどろ蛙のこゑの頭  
にひゞくなり

風落ちて晝をひそけし氣のつけば若葉ぬらし  
て雨そゝぎをり



眼を閉ぢてひとりこそ聽け夜くだちを裏山若  
葉騒立つる音

移轉のうた（四首）

十二年住み馴染みたればわが家の如く思はれ  
て去るをわびしむ

移りきて日もまだ經たぬ昨日今日わが身のま  
はり心に落ちつかぬ

心まだ去り來し家にのこるらし夜ふけを覺め  
て部屋をあやしむ

この家を滴翠房とこそ言はめ戸練るすなはち  
山嵐かも

初夏の情趣（五首）

朝の戸をひらきてすがし新胡瓜鹽もみにして  
食卓に居對ふ



蚊遣する煙はつかになびきつゝ湯あがりの肌  
に山風すがし

代かきも終へて水張るこれの田に月冴えて蛙  
の聲そろひ鳴く

早苗田をはつかにかよふ風ありて山木のかげ  
を月は外れたり

月のかげとゝのはぬかも早苗田をそよとの風  
の吹きかよふらし

夏日素描（六首）

丸窓をひらくすなはち柿若葉さやに風ある部  
屋をよしとす

虫ばみし葉も交りゐて實茨の簡素愛でつゝ投  
入れにせし



短冊の軸に添へつゝ涼しかり實いばらと薊投  
入れにして

裏庭の空地よろしみ植ゑつけしトマトのふと  
り見つゝたぬしむ

新胡瓜赤味噲つけて喰ふによし冷えにしビ  
ル酌みつゝ宵を

若鮎の胃の腑の苦味涼しもよ湯あがりの縁に  
食卓<sup>たぐ</sup>を据ゑつゝ

雲板に百豊が桔梗の圖を挟み夕べ涼しく母と  
茶を喫む

伸びるまゝ伸ばせし庭の八重むぐら夜風はさ  
やく露こぼしつゝ



雨霽れて裏山木々にわく風のそゞろ通ひ來軒  
の簾に

汗ばみてしましを憩ふ山蔭の風は冷えたりみ  
そ萩の花

沖よはるか寄せくる波の幾うねり島にくだけ  
てしぶき揚げたり

向つ島暗くすわりて碎け散る波のみ白し月の  
したびに

梅干が乾せる匂ひの窓にくる土用五郎の日ざ  
かりの風

葦の葉のはつかそよげる河風に橋の上涼し夕  
月のかげ



ほのぼのと明けそむる蚊帳のそよぎすら心し  
たしもよ寝たらひし身に

見なれたる裏山ながら寝たらひし此の朝覺め  
に見ればしたしも

雲丹あれば汁も欲りせじ此の頃はぬくき朝飯  
うれしくもあるか

さゝやかに結びたる實をいとほしみ胡瓜を床  
に活けておもしろ

いち早く蜀黍もろこしの葉に音たてゝ庭草叢に夕立の  
くる

凋えたるグラデオラスに霧ふくと持てば花瓶  
手にぬくかりし



湯浴みして夕べを部屋に寛げばグラチオラス  
も呼吸つけるらし

土用早や五番を過ぎて夕ぐれを庭草叢にこも  
る風冷ゆ

青紫蘇をきざみ入れたる胡瓜もみの匂ひすが  
しも夕餉の膳に

けふるがに降りそゞ雨庭草につめたくひそ  
む螢のひかり

山陽線車中（四首）

谿をゆく車輪のひゞき高けれどしき鳴く蟬の  
こゑは頭に牙ゆ

須磨明石の松原つゞき車窓ゆ入る風をすがし  
みうつゝなにゐる



雨雲のきれ間たまゆら照らふ陽に姫路の城の  
くきやかに見ゆ

放ち飼ふ牛臥すもあり佇つもあり夕べのどけ  
き備前平野は

尾道市にて (二首)

これやこの尾道の街停車場を出づれば巷の灯  
は華げり

濱根家にて (三首)

はゝそはとをばとの間に今宵寝て心たらひつ  
つ眠られなくに

風呂わくと案内のまゝに一番湯つかひて旅の  
こゝろ足らへり

切り髪の叔母が爪弾く秋の夜の賤機帯の曲は  
かなしも



太田家にて (三首)

たゞく蹴る寝態のあしき子を守りて熟睡せぬ  
間に一夜明けたり (啓義と共寝して)

いみじくも伸びけるものかおのづからをとめ  
ごゝろを失ふなゆめ (高女一年副長となる静子へ)

われをのみ戀ひてはなれぬこの家の子らに別  
れのこゝろ歎かゆ

濱根家・山波別邸にて (三首)

砂の丘松の林の此の庭ゆすぐさまつゞく瀬戸  
の海はら

潮風の吹きのままに庭松のおのづからなる  
姿なりのよろしき

戸を練ればすなはち瀬戸の潮の香のそこはか  
となく部屋にたゞよふ



降りつゞく雨を歎かひ傘さして倒れし籠の菊  
をたばねし

襖障子入れて秋めく部屋ぬちに夜をくつろぎ  
て心静けし

張りかへし障子の白さ秋づきてスタンドの灯  
の親しくも見ゆ

松の葉のとがりしみゝに照らひつゝ山木の梢  
に月さやかに

さゝやかな庭の小草もかけもちていよゝ牙え  
ゆく秋の夜の月

秋もすでに更けにし雨かあかときを肩のあた  
りに冷え應ふなり



床ゆ起ちしわがあなうらに素疊の冷え應ふな  
りまさしに秋なり

これといふ家具もあらねば部屋ぬちの常にか  
たづく母とわびしむ

成績をあらそひし友の教員になりしと聞くも  
病みの小床に

鷹揚に粧ひては居れ職業もつ友に對へば心お  
さるゝ

君が持てばいぶかしきまで禿筆も動きてたち  
まち繪の生きし來し（光利畫伯に寄す）

早川浩二郎氏を訪ふ（一首）

口髭をたくはへましてふたゝびを相逢ふ君の  
面がはりかも



母病む(三首)

病む母によくつくさむと思ひつゝ男はあはれ  
氣が利かぬなり

心のみあせて頓馬をやるわれに病みます母も  
吹き出し給ふ

飯いを炊くすべも知らねば今日もまた糊にさも  
似し粥をまゐらす

病みつゞく身のうたてなれ藥劑師もるべき藥  
われに計れる

病みつゞくわれにもあはれ生きものゝ望みは  
ありし夜半の目覺めに

あが抱く寒雉の火鉢したしもよほどよくぬく  
さ身ぬちにかよふ



九左衛門の釜鳴りしたし庭さきに絶えてはつ  
づく晩秋の虫

渡満兵を見送りて (三首)

日の本は神の國なり神の子の行きゆくところ  
敵あらめやも

やつゝけて来るぞと胸をたゝきつ笑ひし友の  
頼母しきかも

國思ふまことに燃えて征く友の萬歳の聲は胸  
にひゞくも

母とふたり床敷きならべこれといふ話もあら  
ずひそやかに寝る

覺めきらず心うつゝの寝がへりへほのぼの匂  
ふは水仙ならむ



かすかなる熱にねむれぬ夜のほども水仙の香  
の強すぎるなり

底冷えを母と言ひつゝ戸を繰れば音なく更け  
て雪つもりをり

昭和十一年

わかき日にありてふ戀もわれになく病めばわ  
びしき春ぞ重ぬる

天地あめとちのひかりの中に病みつゞけ十とまり五ごとせ  
よく生きて來し



病みながら苦しみながら生きて來しわが玉の  
緒の強くもあるか

寒さやゆるむ夜ごろや屋根雪の落つるひど  
きにいくたび覺めし

病室に春めく光みなぎりて今朝の水薬は澄み  
透りをり

艶のよき紫檀の茶棚に白梅の一枝がつくる配  
置おもしろ

碧梧桐の色紙にそへて見るからに枝のみの梅  
またあはれあり

天地の恵みうれしもおのづから湧く湯にひた  
りものを思はず



表面うはべやゝとりすまし居れゆきすりの戀をわが  
知る春の湯の町

朝戻る藝者かなしも幼きゆ知る子にあれば聲  
かけかねし

白銀屋茶寮より關汁會に招かれて (三首)

この部屋に入るやすなはちほのぼのと香の匂  
ひす靜かに坐さむ

素地のまゝ無雜作に張りし天井の節目もよけ  
れこゝは持佛堂

鶯の軸にそへつゝおもしろく古代酒壺に活け  
し寒木瓜

ほうほうと梟鳴くなる雪の夜をしはぶきにつ  
つねむれざりけり



音たてゝ降りぬし雪のいつしかに霽れて玻璃  
戸に月さしきたる

苔むせる玉垣の上に淡雪のはつはつ見えて朝  
のひそけさ

ひつそりと晝を閉せる此の家の板扉越しに紅  
つばき咲く

石垣のはつかの隙を萌え出でゝ春陽に匂ふ草  
の芽を見し

春はすでに彌生となるも降りやまぬ雪をわび  
つゝ母とこもれり

餘裕ある生活にはあらね朝ごとに喰ふぬく飯  
はありがたきかも



稼いでも稼いでも喰へぬこれの世にあそびな  
がらに飯喰ふわれか

南風雨をさそへば夕ぐれの雪解目に立ち庭の  
明るさ

この道の乾き春めき下駄の音かろくひときて  
行くにたぬしも

葛城朱鳥氏筆慈姑の圖に題す (一首)

無雑作に慈姑を二つならべつゝ餘白がたもつ  
しまりよろしも

葦附支社發會式(藥王院) (一首)

歌論やゝおとろへて來しひそけさに夕山寺の  
鐘きゝてゐし

ポスターの紅色はげて流れつゝ夜をあたくか  
に降りそゝぐ雨



橋桁にからみてゆらぐ水草にをりをり小魚群  
れてあそべり

降りやまぬ雨に量ます河口の瀬をはやみつゝ  
橋に應ふも

断崖の水づく際に生えし木のゆれやまざるこ  
胡蝶とまれり

ゆれやまぬ水際の草に蝶ひとつとまらむとし  
てはたゆたひてをり

温泉電車（二首）

山ぞひの彎曲線を徐行する電車のどけくさへ  
づりを聞く

白雞の羽ばたくなべに埃りたつ庭の芝生に春  
日照らへり



外出すれば仕事せる人目につきて追はるゝが  
ごとく家にかへれり

朝の間のひとゝきを讀む新聞の匂ひすがしも  
野うぐひす鳴く

向ひ家の椿若葉にさやく風朝の目覺めに聞け  
ばすがしき

羽織ぬぎて外に出て來しすがしさや頭の上か  
すめて燕飛びたり

この寺の裏塀つゞき雨はれて公孫樹若葉の匂  
ひしるけき

あちや旅館にて (二首)

この林泉の靜寂にひたりをりをりをおどろく  
ものか鯉はねる音



六十年に一度より花咲かぬてふ沙羅の繁りを  
見つゝかなしむ

S 女に寄す (一首)

戀すてふ君が文こそかなしけれわれかりそめ  
に戀すべからず

鞠つき

春深み夏近ければ 朝ゆうべ

此處に 彼處に い群れつゝ鞠あそぶ子ら 右  
手につき左手に打つや 一・二・三・四・五 スカ  
トをひるがへらせつ 六・七・八・九・十 くる  
り廻ればズロースの くれなるこぼる足くゞせ  
つ 河童の子お下げの子らのかはるがはる 歌  
ひ打ちつゝ飽くとなく ひと日くらすははしや  
しかも

反歌

春深き道べに群れて日のひと日鞠つく子らの  
はしやしけれ



白山電鐵（一首）

この電車ゆくがまにまに窓ゆ入る風ほのぼのと肥この匂ひす

能美平野（一首）

生ひそろふ蘭の田つゞきを行くからに雪の白山くきやかに見ゆ

初夏の感覺（一首）

日毎々々みどり濃くなり風吹けば樺の葉すれかたき音する

柿の葉の日毎々々にふとりつゝ此の頃かよふ風のすがしさ

今日よりをセルに着がへし湯がへりの膚はだすがしく風薫るなり

湯がよひのゆきゝをたどるお薬師の石段すがし若葉そよぎて



茄子苗をふれ賣る人の聲たかく巷の雨は夏め  
きにけり

夏めきし雨の夜はよし病みあとの手足ひろげ  
てのびのびと寝む

エスベランティスト竹内藤吉畫伯宅にて (二首)

陽の裏の葉かげゆ挽ぎし櫻桃の實はひえびえ  
と露をふくめり

陽のぬくみ未だしたもつ櫻桃の實を喰ひをれ  
ば月のぼりたり

たそがれの庭にしんしん静もり咲く白き牡丹  
は目にとめて見つ

防空演習の夜 (五首)

空襲警報来るやすなはち燈を消し、巷うれし  
き星月夜かも



燈火管制なりてしたしも出會ふ人誰とは知らぬ聲かけて行く

燈火管制またくなりたれ星空の明りほのかに部屋に及べり

燈火管制またくなりたるひそけさに螢すいすい飛べるすゞしさ

防空演習の主旨を知れりや酒場バーに入る防護團員許すべからず

夕ごろ落ちつきて來し裏庭に羽音かそけく蜻蛉飛びかふ

粟津温泉法師善吾樓（一首）

梅雨けぶる庭に芝植ゆ男らの大き菅笠やゝに濡れゆく



薬師寺にて（一首）

この寺の老樹青葉に降りそゞ真晝間の雨は  
ひそかなりけり

白銀茶寮にて（一首）

椽の葉に音なく梅雨のしぶきつゝ置燈籠のひ  
そともれる

高價藥なれど惜しませず買ひ呉るゝ母の服装みなりの  
貧しきをおもふ

職も持たず薬費かさめば友どちの交際やめむ  
と思ふいくたび

バルコニの手すりに青き黴生えて梅雨の小雨  
のいく日かつゞく

積まれある薪の切り目に黴生えてこの山峽に  
梅雨けぶるなり



一三四  
朝庭に胡瓜もがむと蔓たぐる袖にこぼれて露  
のすがしさ

裏畑の肥の臭ひのむせかへり眞晝のあつさき  
はまりにけり

汗あへぐ日のみつゞけばそくばくのもの買ふ  
店ゆ團扇とゞきし

潮焼けの子のみ入り来る夕風呂に一日の暑さ  
人らかこてり

二階住ひの歌（一首）

下の人留守なりければ部屋中を足踏み鳴らし  
歩いて見たり

虫送りを歌へる（三首）

初かと聽けば聞ゆる太鼓の音虫送りするは此  
處のみにあらず



ふいに焚きし松明の火は虫送り見に来しわれ  
の顔を暴らしぬ

孫負ひし老婆もまじり虫送りの松明かざす星  
月夜かも

病み臥せば暑さきはまる眞晝間を蟬なく聲の  
頭に泌むごとし

たなばた(二首)

七夕の竹に寄りそひ此の宵は友といくたび星  
を氣づかふ

七夕の竹流さむと出でゝ來し河原道に月を仰  
げり

盆踊のうた(三首)

三味太鼓歌ひはやせど鳴きすます一つこほろ  
ぎ聲はきぎれず



更けゆけば太鼓に氣力みなぎりて踊はとみに  
しまりたりけり

友みなが踊にまじりひとりわれ戻る浴衣の露  
じめりかも

ひそかにも實はむすぶらし蜀黍あまいのそよぎ大き  
く丈そろへたり

地藏盆を歌ふ (六首)

地藏盆けふは童があるじとてなかなか水を汲  
ませて呉れぬ

地藏盆の飾りそれぞれ場所を得て子は子ろど  
ちに仕來りはあり

地藏盆の供物今朝より減りしとふその犯人の  
詮議ぞ今は



地藏盆今宵ばかりは神妙な子よ念佛を口に絶  
やさず

經を誦す僧のろしろに神妙な顔をそろへて風  
おくる子ら

お賽錢さゝぐるわれへ「極樂に行けるぞ兄貴」  
とおでてし子あり

盆踊のうた―追加（一首）

旅の恥かきすてにしておもしろし手ふりあや  
しく踊り出したり

服部神社例祭（六首）

いまだ消ぬ幼なごころか祭禮の朝の烽火は吾  
を寝さしめず

瑞秋の柿の廣葉につゝみたる祭の鮎は賞でつ  
つ喰まな



人を呼ぶ野師の魂膽と知りぬつゝやすやす寄  
るも祭ごころに

歌ひつゝ踊る夜ふけの露じめり裏山かけを月  
は出でたり

夜ふかすを母は憂へんたけなはの踊なかばを  
惜しみ歸り來

心をば踊にのこし戻りくる步調たまたま鼓拍  
子に合ふ

土田實・正木通子夫妻に（一首）

二科會の君らいもせをたゝへつゝふりさけみ  
れば星のきらめき

わが病癒ぬをこぼしさしぐめば母も黙しつ虫  
しぐれ聞く



草なべて露たもちつゝ朝明けのこのすがしさは  
まさに秋なり

すでにして秋は來向ふ糊つけし浴衣素肌にそ  
ぐはざりけり

母病みて(二首)

柔<sup>や</sup>き強<sup>た</sup>き出來まかせなるわが粥を小言は言は  
ず母食<sup>か</sup>し給ふ

母病みて粥喰ふからにわれも亦粥を喰ひつゝ  
二人ぐらしの

咳きつゞくわれの外をなかなか母は許さず  
又秋や來し

刈りたての頭ひえびえ仰ぎみる空の青さもす  
でに秋なり



着飾りて寺まゐる人ひきよらず柿の色づく彼  
岸中日

觀月の宴に佳招を受けて (三首)

友が酌ぐこの盃に月光のたまたまやどる歌は  
さらめや

月冴えてひそまり深き家々の蔓しみにらに光り  
はじけり

裾ぬらす露のしめりをこゝろよみ戻る山路の  
月のさやけさ

松茸の出さかる頃や辻々に牛肉廉賣のピラ張  
られたる

隙間もる風の冷ゆるに戸障子のあけたてきび  
しく母は氣づかふ



病ひもつ身に秋は憂し重ね着のその上をなほ  
母は氣づかふ

ほろほろと松葉こぼるゝ飛石の苔のしめりに  
秋日かけり

山の端に夕焼雲のなびきつゝ芒萱原風わたる  
なり

稻架<sup>は</sup>かける人ゐのこりて刈り上げし田の面<sup>も</sup>は  
ろばろ月夜となれり

薄暗き燈に縫ふ母へ小説を読み聞かせ居れば  
雁の啼き過ぐ

A子に寄する (二首)

居<sup>い</sup>對<sup>たい</sup>へば胸のときめきあはれわれ君戀ふると  
は言はでやみにき



あが戀ふを知るや知らずや無邪氣なる君がふ  
るまひ愛しかりけり

病床に飯を喰はせて貰ひつゝあまゆるこゝろ  
母におきたり

熱やゝに昇りゆくらし夜の更けをとぼしらに  
鳴く庭さきの虫

報恩講 (二首)

人込みを分け来て母と山門に出づれば冷ゆる  
月夜なりけり

報恩講戻りの道に風いでゝ月夜しろじろ埃立  
つみゆ

湯の祭の歌 (五首)

萬石の湯は湧きしてふよろこびのきほひ立つ  
今日の烽火何發



臥床にあが落ちつかず湯祭のさはめきはつひ  
に外出せしめし

幕合の永きつれづれいつしかにあが眼目よき  
女もとめぬし

撥さばきこゝろよきまで湯まつりの秋の夜空  
に音にひどかふ

かりそめのいたづら心あえかにも舞ふ妓のひ  
とりに戀を寄せしか

べーチ繰る指の冷えや此の夜ごろまたく絶え  
たる虫の聲はも

たまさかの病ひよき日を髭剃ると對ふ鏡臺に  
澄むよ秋空



勅題「田家雪」(三首)

ひとしきり雪を降らせし雲去りて山裾の家に  
日かけさしたり

楷明りをりをり洩れて小田が家の夕べひそか  
に雪降りつもる

吹雪く夜を話しふけつゝ子ろどちと楷火うれ  
しく薯を焼くなり

木々なべて落葉しつくす山の端に九谷の窯の  
けぶり立つ見ゆ

不眠症(二首)

山鳴りをきゝつゝあれば夜のほどろ行火のほ  
てり頬にのぼるも

冬をこもりて(一首)

わが歌の素材せまきをかこちつゝ六疊の部屋  
にあけくれぞ臥す



方尺の窓外の景見あきつゝ病みこもらへば歌  
まとまらず

他の部屋に行かでことたる此の部屋の雜然た  
れば客に氣をおく

讀むほどのものなべては讀みつくしつくづく  
外が戀しくてならぬ

ともすればソシアリズムにふれてゐる思想か  
なしも長病みわれは

いつしかに世を拗ねものとなりてゐる長き病  
ひはかなしむべかり

病みつゞくわれのみたよりに老いたまふ母を  
思へば死なれざりけり



昭和十二年

飾りなき部屋に目ざめて元朝のこゝろひとゝ  
きわびしさにゐる

初めて稿料を得て迎へたる元日なれや心もな  
ごむに

元日をうれしむとにはあらねども心ほのぼの  
雑煮食したり

母と子のいのちかしくみ元朝をつゝましやか  
に祝詞かはすも

病みつぎて未だもたもつ玉の緒のたふとくも  
あるか元日の朝



日の本の大御光をま靈しくも身に浴みてこそ生  
けるいのちぞ

さゝやけき松飾りなれやわが宿の出入りに見  
つゝ心すがしも

母と子と變哲もなくこもりゐて飾り餅もちのちひ  
さゝも言ふ

こもりゐて日にいくたびか眺めやる飾り餅もちは  
さやかに過ぐ

冬三題

床ぬちにベシとる指もこゝゆるにあがもの濯  
ぐ母を氣づかふ

床ぬちにゐてひく風邪のなかなかに癒え難け  
れば永き冬かも



電車すら通はずなりし深雪に宵の口より鼻啼  
くなり

春めく(三首)

軒の端の凍みとけそめてうらうらとぬくとき  
日ざし部屋に満ちたり

雪消えし道のべにして華やかに友禪染の店ひ  
ろげをり

大道の呉服の店にをみなどちかたまりてをり  
春はうらゝに

自 嘲(三首)

なれるてふことのかなしき病床やまどにわが年経る  
を歎かずなりぬ

病むことを言ひつ人ゆあはれみを受けむとし  
てゐる卑屈さをおもふ



男われ二十四にしてつひに起たず病みてしあれば金を欲りすも

たらちねをいとしとは思へ行末のあてもなく病めば言のとがるに

われをのみたよりわたまふ母ゆゑに病み永らへていのち生くべし

彼岸前後（六首）

藪かげのぬかるみ道の敷藁に落ちたまりたる  
紅つばきはも

敷藁を踏みつゝ行けば泥にじむ藪裏道の紅椿  
のはな

重き荷に道はかどらず傘を壓す雨氣の雪の手に  
應へ來し



經を誦す御僧のこゑ沈みつ鳥啼く境内に晝た  
けにけり

庭らしき庭にはあらね相つぎて二本の梅咲け  
ばうれしき

ちんどんや歌ひはやせば大人さへとり巻きて  
をり晝のどかに

大朝訪歌飛行機「神風號」に寄す（一首）

高渡るコース一萬五千キロ大日本の神風よ征  
け

郵税値上げ（一首）

せめてわれ郵便代を儲けたし男の子二十四希  
ひかなしも

金魚賣きたる（三首）

いちはやく春を呼びくる金魚屋のふれ聲さえ  
て晝のどけさ



どの家もひそまり深く晝たけて金魚屋の聲よ  
くほるなり

通り過ぎし金魚屋の聲しましなほ遠きにきこ  
ゆ晝のけだるさ

防火デー(三首)

四月の空晴れわたりきほひたつ火消し男の子  
がわざくらべかも

吸殻もゆるがせにせぬ防火デーのひと目こゝ  
ろの緊張ゆるまず

はゝそはも氣の緊るらし寝に就くとかまど見  
に立つ防火デーの夜

春 蘭(二首)

友どちが持て來し春蘭香に立つや外の面は春  
となりにつらしも



鮮<sup>あたら</sup>しき春蘭の香をすがしめば病みのいのちの  
根づよきものか

遇へば笑む顔見知りなる美<sup>よ</sup>き女<sup>ひと</sup>と夜ざくらの  
灯に遇へりけるかも

疾<sup>はや</sup>ち風縦横無盡に荒れくるひ晴きはまりし空  
のゆるしさ

うちつけに吹きくだしくる疾<sup>はや</sup>ち風うなり上げ  
つ家軸ゆするも

春浅の枯木秀並と秀<sup>よ</sup>をきそひはろばろしかも  
よ雪の白山

あけおきて冷えを覚えぬ北窓に柿の若葉のそ  
よぐすがしさ



なやましき夢に目さめて小夜床にわが童貞を  
ふともさびしむ

五月十二日午前一時出火百二十餘戸焼失 (三首)

人らみな火消しに行けど病もつ男の子はあは  
れ家まもりをり

人形持て火をのがれ來しをさな子を燈のなき  
部屋にあが抱きぬし

はろかにはへだたりながらまがつ火の明りた  
またま部屋に及ぶも

兼六公園 (一首)

若葉せる兼六園の朝雨に傘をすぼめて行くが  
ひそけさ

焦土に佇ちて (三首)

なぐさむる言葉も知らに友が家の焦土に友と  
わが佇てりけり



いさゝかの品をならべてかにかくにあきなひ  
初めしバラツクの店

バラツクの建ちそろひつゝやうやうに町のか  
たちのとゝのひて來し

新緑抄(二首)

田植女ら笠をつらねて行く道の禪若葉に朝の  
雨降る

母と卷く笹のちまきの香にたちて五月の窓に  
風そよぐなり

病心にふるゝもの(八首)

埒もなき空想を母と語りつゝさびしき心にわ  
が堪へむとす

さびしさに觸れむこゝろを怖れつゝ母がなげ  
きは打ちけさむとす



さびしさに堪へむとすれば母にいふ言葉いつ  
しか尖りてゐたり

泣くことも忘れむとするかかなしみに慣れつ  
つわれのこゝろつめたし

人前にさかしらぶりても言ひしその日のな  
かば黙しつゞけぬ

せはしさに歌ならぬてふ友どちのたより美し  
みわが病みてをり

病みつぎて水さへやらぬおこたりに鉢の木つ  
ぎつぎ枯らせてもとな

病みつゞけば思ひたぬします今日もまた母に  
黙して早寝せりけり



コスモスの苗を植ゑつゝこの花に逢ふべきい  
のちわが疑はず

降りつゞく雨間に挿しゝ薔薇の芽の根につく  
らしきたしかさは見ゆ

日<sup>け</sup>ならべて雨降りつげばわが植ゑしコスモス  
の苗枝葉張りたり

あが植ゑしもの根につくや病みながらなほも  
いのちのすこやけくこそ

したゝかに音ひゞかせて朝あけを柿の若葉に  
雨降りいでぬ

裏山の若葉騒<sup>さわ</sup>立て吹く風に夜はしたゝかに風<sup>かぜ</sup>  
鈴<sup>かね</sup>鳴りしきる



北支事變勃發 (二首)

起て起ていざ日本男の子が雄ごゝろに對ひた  
つべき敵あらめやも

大君の御稜威かしこみひたむきに國のまもり  
に起たむ秋ぞも

喰ひつぶす生活思へばおのづから物價騰貴を  
母と歎かな

M子に興へて (四首)

戀ふるてふ文あまたゝびをとめ子がまことご  
ころに氣おされむとす

貧しくて病みつぐわれぞ戀ふるてふ君がこゝ  
ろに觸れざらむとす

病みなげく吾をいとほしむをとめ子がこゝろ  
ひそかに戀となるらし



よき家のをとめ子君がひとよきのまよひごゝ  
ろぞ吾を戀ふなゆめ

親友東一男君應召 (三首)

病む父を人にあづけて征く友の意氣旺んなれ  
ば涙おさへつ

むすど手を握りしめつたゝかひに征く友の眸  
よわれにま對ふ

見合せる目と目いつしかうるみきて征く友と  
われ黙して佇ちぬ

雜 唱 (三首)

寒蟬のこゑ啼きそろふ山峽の繁りは深く日の  
かけりたり

徒食することをあざける人の前に病もつわれ  
は黙してゐたり



火と燃えていのち消ぬべき戀もあれそを知る  
まではあが死なざらむ

生垣如木國手に（一首）

さびしさを言ひつゝ君が酌ぐ酒の酔もしみじ  
み秋ごゝろなる

荻田政一君より蛤送り來ればすなはち返しに（一首）

籠を解けば蛤すがしく匂ひつゝ厨の隈に朝の  
虫鳴く

米山久夫人來訪（一首）

初めてに逢ひつゝしたしわがために君ををば  
とし呼ばしめたまへ

つはものにくすしのまことつくすべき秋こそ  
來しといさみ起ちけむ

茶碗に題す（二首）

星ヶ岡魯郷山人が書きませし煎茶々碗の名號  
はしたしき



宇は魯郷窯は菁華のこの茶碗秋のゆうべを母  
と茶を喫む

たはむれ (二首)

金なきを人ら知らぬなり生眞面目と賞むる言  
葉は受けておかばや

病後の髭たてゝ見つそのまゝに日をしすこす  
も來る人のなく

事變漫詠 (六首)

國おもふ心は敢へて恥ぢぬらし千人力を娘の  
乞へりけり

千人力乞ひありく娘と今日のみは氣がるく言  
をかはしけるかも

寅年の五黄にあれば千人力乞へるちまたは行  
きはかどらぬ